

第七段 [p. 36・4 ～ 終わり]	第六段 [p. 35・3 ～ p. 36・2]	第五段 [p. 32・4 ～ p. 35・1]	第四段 [p. 30・8 ～ p. 32・2]	第三段 [p. 27・10 ～ p. 30・6]	第二段 [p. 25・2 ～ p. 27・8]	第一段 [初め ～ p. 24・10]
<p>旅先の山道で、「私」は〔⑩ 何か〕の気配を感じる。それは、〔⑤ アロエ〕だった。「私」は祖母から受け継いだ〔⑰ みどりのゆび〕を実感して、人と〔⑱ 握手〕をしたあとのように元気になって、山道を登るのだった。</p>	<p>祖母が亡くなった後、「私」は〔⑮ 祖母の遺言〕に従って、花屋を開くための勉強を始める。</p>	<p>祖母の意識がほとんどなくなったある日、祖母がふいに「〔⑤ アロエ〕が、切らないで、つて言ってるの。」と言った。そして、「植物は〔⑬ 仲間同士〕でつながっているの。」とも言った。看病を交代した後、祖母の部屋に〔⑧ 水やり〕に行った時、「私」は、死は悲しくも苦しくもない、どちらかといえば〔⑭ 幸せないいもの〕だと、植物たちに教えられたような気がした。</p>	<p>祖母は、「私」に〔⑩ 植物の仕事〕に就くことを勧める。祖母は、嫌いだっただ〔⑪ シクラメン〕も好きになったから、 〔⑫ あっち〕では育てることができると、自分の死期を悟ったようなことを「私」に告げる。</p>	<p>祖母は病院で部屋に残してきた〔⑦ 鉢植え(植物)〕たちのことを気にかけていた。「私」は、毎日それらに〔⑧ 水やり〕をしにいつて、祖母の〔⑨ 死〕を考えていた。</p>	<p>生まれ育った家の〔③ 小さなテーブル〕を囲んでいた時、〔④ 父〕が玄關脇の、育ちすぎた〔⑤ アロエ〕を引っこ抜いて捨てると言い出した。そこへ母が帰ってきて、祖母が〔⑥ 末期の子宮癌〕であることを告げた。</p>	<p>旅先での「私」は、〔① 冬〕のはりつめた空気を感じて、ホームに降りた。タクシーに乗り、目指す宿の近くで降りてもらって、細い坂道を登って行くと、前方に〔② 知っている誰か〕の気配を感じた。</p>